合唱における言語活動に関する研究

－コンクール審査員の講評を手がかりに－

髙　橋　雅　子

A study on language activity in chorus
－From the judge of the chorus contest－

TAKAHASHI Masako
(Received September 24 , 2010)

はじめに

平成20年の『学習指導要領』における重要な改善の視点として、音楽科を含めた全教科で「言語活動の充実」が目指されている。特に鑑賞領域の活動では、中学校で「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと」と示された。表現領域の活動では、『中央教育審議会答申』の「改善の具体的事項（中学校）」において「合唱や合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、表現したいイメージを伝え合ったり、協同する喜びを感じたりする指導を重視する」と示されたものの、この文言に目新しさは見られない。

本稿は、音楽における志向性と言語の関係を論じた上で、合唱コンクール審査員の講評において使用された語句[1)]を「音楽を形づくっている要素」をもとに抽出し直し、さらに４つの形容詞に分類してその傾向を明らかにする。具体的に抽出された語句やその効果的な使用方法は、音楽科における言語活動のあり方に示唆を与えるとともに、合唱における指導言やグループ活動の可能性を広げるものとなるだろう。

１．音楽における志向性と言語

『学習指導要領』で示された「聴き取る力（知覚）」と「感じ取る力（感受）」は、主観的体験における「感覚的クオリア[2)] sensory qualia」と「志向的クオリアintentional qualia」として把握できるのではないかと思われる。ここでは、茂木（2001）による志向性と言語の関係について検討していく。

１－１　感覚的クオリアと志向的クオリア

茂木（2001）は、「およそ私たちが主観的に体験できる心的状態は、全てクオリアだという立場(p.46)」をとっている。クオリアは、大きく分けて「感覚的クオリア」と「志向的クオリア」の二種類があるとされる。彼は、両者について「薔薇」を例に説明している。(pp.47-48)

１）筆者が指導した深堀頌子（2008）の卒業論文「音楽教育における合唱評価に関する一考察　－全日本合唱コンクール審査結果の分析をもとに－」において論じられた講評から、抽出し直している。
２）クオリアqualiaは「質感」のことで、もともとは「質」や「状態」を表すラテン語である。

感覚的クオリアとは、例えば「赤い色の質感」のクオリアであり、視覚で言えば、色、透明感、金属光沢など。外界の性質が鮮明で具体的な形で感じられる時の質感である。「薔薇」をそれと認識する前の、視野の中に広がる色やテクスチャ（きめ）などの質感が感覚的クオリアである。…（中略）…一方、視野の中の「薔薇」を構成する感覚的クオリアを「ああこれは薔薇だ」と認識する時に心の中に立ち上がる質感が志向的クオリアである。…（中略）…志向的クオリアは、「赤い色の質感」に比べれば抽象的でとらえどころがないように感じられる。

また茂木は、私たちが意識的に体験するさまざまなことは、これら二つのクオリアの組み合わせで把握できるとし、次の表１を示している。

表１　感覚的クオリアと志向的クオリア

	具　体　例	対応する神経回路網と性質
感覚的クオリア (sensory qualia)	視覚的クオリア(色、光沢、透明感など) 聴覚的クオリア(ピッチ、音色など) 触覚的クオリア(熱、冷、ざらざら、すべすべなど) 嗅覚的クオリア（薔薇の香り、硫黄の臭いなど） 味覚的クオリア（甘い、辛い、酸っぱいなど）	末端から中枢に向かうニューロン活動に対応。 (視覚的クオリアの場合、第一次視覚野に始まるニューロン活動) ある程度固定的な回路(同じ入力に対しては、ほぼ同じ感覚的クオリアが引き起こされる)
志向的クオリア (intentional qualia)	視覚野の構造を作る顔、四角形などの形や、動きなどの、高次の視覚特徴 ボディ・イメージ 言葉の意味 時間の流れの感覚 空間の広がりの感覚 「自己」の感覚 運動コントロールの感覚	中枢から末端に向かうニューロン活動に対応。 文脈などを反映してダイナミックに変化。同じ外界からの入力に対しても、その時々で異なる志向性が引き起こされる。志向的クオリアは、志向性の一部が意識されたものである。

茂木健一郎（2001）『心を生み出す脳のシステム　私というミステリー』p.64より抜粋

今、目の前に実際にあるものを見る時にのみ、それを「感覚的クオリア」とともに表象し、それ以外は「志向的クオリア」が単独で立ち上がっているとされる。「脳は、『現在』『自分の外』にあるもののみが、感覚的クオリアを伴って表象され」、「両者の区別が、自己の『内』と『外』、過去、現在、未来という空間的、及び時間的な位相構造を支えている」のである（p.55）。

１－２　志向性と言語の関係

茂木（2004）は志向性について、「私たちが何かを見ている、何かを意図している、何かに注意を向けているというように、外の何かに向けられる〈私〉の心の性質を指す」とした上で、「言葉の意味は、私たちの心の中で志向性として成り立つ」と述べている(pp.75-76)。すなわち、「言葉を表す音声や文字がある特定の何かを指し示す（志向する）という形で、言葉の意味は成り立っている（p.76)」のである。

ところで、茂木（2001）は「感覚的クオリア」を「言語化される以前の原始的な質感」、「志向的クオリア」を「言語的・社会的文脈の下に置かれた質感」と言い換えている（p.48)。

ではこの両者がどのような関係にあるのか、介在される志向性とのかかわりから考えていきたい。

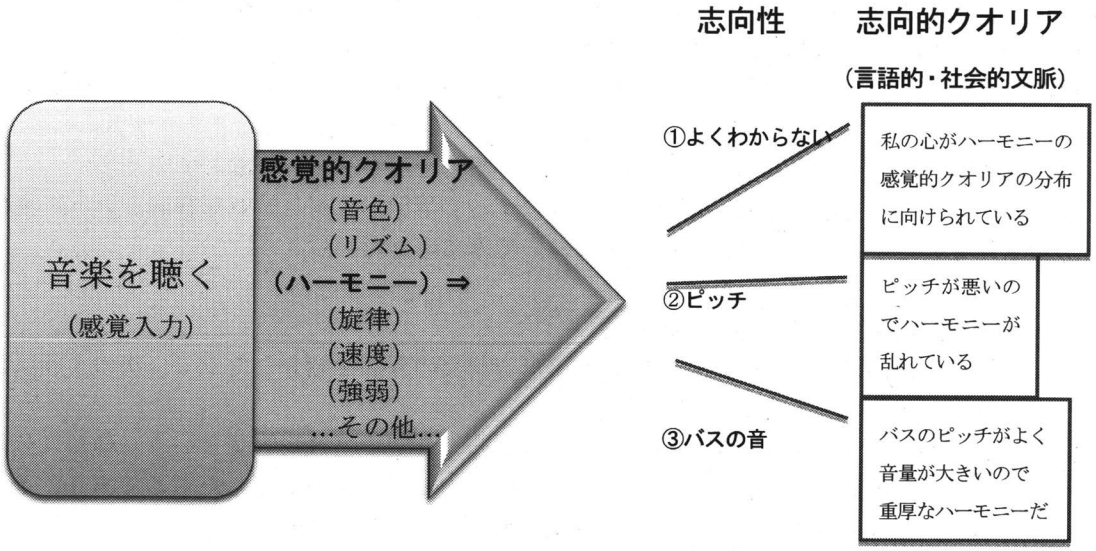

図１　音楽と志向性　ー感覚的クオリアと志向的クオリアの関係ー

私たちが心の中で何か外のものを表象する時は、「感覚的クオリア」「志向的クオリア」が対になってマッチングが取られている。

「感覚的クオリア」は、感覚入力がないと成立しないとされる。この「感覚的クオリア」は同時並列的に感じられるのに対して、「志向的クオリア」は一度に限られたものしか感じられず、この性質がもっとも極端な形であらわれるのが「言葉の意味」である。「言葉の意味は、視覚、聴覚、触覚といった感覚のモダリティに関係なく、共通の解釈＝志向的クオリアとして心の中に立ち上がる（p.83）」のである。

音楽を例に考えると、表１に示したように「感覚的クオリア」には「聴覚的クオリア（ピッチ、音色など）」があり、このクオリアが「どのような空間、時間的な構造の下に心に感じられるか」、つまり文脈などを反映してダイナミックに変化し、同じ外界からの入力に対して異なる「志向性」が引き起こされる。その志向性の一部が「聴覚的クオリア」との関連で「言語活動」によって意識化され、「志向的クオリア（私は今、○○を感じている）」となるのである。

図１を例に、具体的に考えてみよう。①で示したように、志向性がよくわからず「感じ取る力」がはっきり認識できないときでも、「私の心が○○のリズムや○○のハーモニーの感覚的クオリアの分布に向けられている」という感覚は「志向的クオリア」として立ち上がっている。②は、志向性が主にハーモニーのピッチに向けられた時で、「志向的クオリア」として「ピッチが悪いのでハーモニーが乱れている」という感覚が起こる。③は、志向性が主にハーモニーのバスの音に向けられた時で、「バスのピッチがよく音量が大きいので重厚なハーモニーだ」という「志向的クオリア」が立ち上がることになる。

２．形容詞の分類

形容詞を形で分類すると、「イ形容詞」と「ナ形容詞」に分類できる。

形容詞とは、辞書によると「用言に属し、活用があり、終止形語尾が口語では『い』、文語では『し』であるもの。物事の性質・状態または心情・感情などを表す」とされている。活用による語形変化をすることによって、文中で連体修飾語として機能するほか、述語や連用修飾

語としても機能する。また、古語文法の伝統に従って一般的に「形容動詞」と言われているものは、「終止形語尾が、口語では『だ』、文語では『なり』『たり』であるもの。事物の性質・状態などを表す点では形容詞と同じ」であり、活用の型の違いに応じて「ナ形容詞」として分類される。

本稿では、これら「イ形容詞」と「ナ形容詞」の両者を形容詞として論じていく。

従来の日本語形容詞研究では、形容詞の意味によって情態形容詞と情意形容詞という二種類に分類されていたが、ここでは近年の分類についてみていきたい。

2－1　尾上（1997）による形容詞の分類

大石（2006）は、尾上（1997）による日本語形容詞文の分類を紹介した上で、次のように説明している。(p.5)

従来、対象の属性を描写する情態形容詞と、人の感情を表す情意形容詞という二種類に分類されていた日本語の形容詞を、主語の立ち現れ方によってさらに細分化したものであり、それぞれの形容詞文が取りうる主語の意味的な役割と形容詞の意味が、例文とともに示されている。

尾上（1997）による日本語形容詞文の分類	
A. 情態形容詞文	
属性の持ち主―属性	花が赤い/部屋が暗い
属性の位置する領域―属性	（この花瓶は）色が青い/（この棒は）長さが短い
A'. 評価の形容詞文	
属性の持ち主―属性（評価込み）	この部屋はきたない/この娘はかわいい
部分・側面―評価（属性込み）	（この部屋は）壁がきたない／（あの娘は）目がかわいい
B. 情意形容詞文	
情意の対象（機縁）―情意	父の死が悲しい/故郷がなつかしい
情意の主者―情意	わたしは悲しい/わたしは懐かしい
B'. 欲求の形容詞文	
欲求の対象―欲求	水が飲みたい/時間が欲しい
欲求の主者―欲求	私は飲みたい/私は欲しい
C. 温度・痛覚の形容詞文	
感覚の機縁―感覚	バラのとげが痛い/氷が冷たい
感覚の主者―感覚	わたしは痛い/わたしは冷たい
感覚の場所（身体の部分）―感覚	足の裏が痛い/指の先が冷たい
D. 存在に関わる形容詞文	
存在するもの―存在量	水溜りが多い/間違いが少ない

尾上の分類は「国語学の伝統に則ったもの(p.6)」、すなわち、A(A')の「情態形容詞」とB(B')の「情意形容詞」という二分法を踏襲している。C及びDについて大石（2006）は「C の温度・痛覚の形容詞文が情意形容詞とは別に立てられているのは、これが感覚の機縁(感覚をもたらす原因となる物事)、感覚の主者(感覚を感じる人間)の他に、感覚の場所も「が」格に現れるからである。D の存在の形容詞文は最後に挙げられているが、外部の存在について述べるという点では、情態形容詞と連続性を持つだろう（p.6)」と述べている。以上のことを踏まえて、大石が「意味的な連続性に注目して並べなおし、意味地図として表した(p.6)」のが図２である。

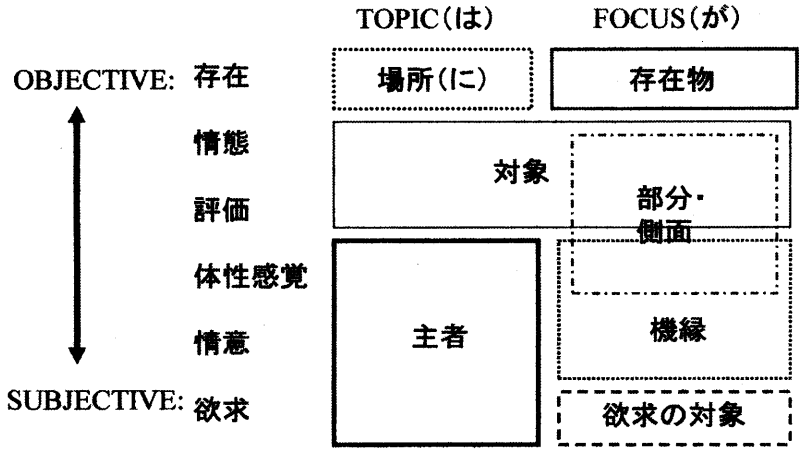

図２　日本語形容詞の主語の分布による意味地図

大石亨（2006）「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」p.6より抜粋

２－２　頼（2006）による形容詞の分類

頼（2006）は、日本語形容詞研究の分類について概観した上で、あらためて「感情形容詞とは何か」を考える必要性を述べている。彼は、「日本語シソーラスにおいて、心理表現を表わす語として感情形容詞がどのように取り扱われているのか（p.195）」について考察している。まず、「表現主体の視点を基準に、感情形容詞を感覚形容詞と区別して考えた上で、先行研究における分類法を調整して（p.209）」、日本語形容詞分類として次の４つを提案した。（pp.209-210）

① 感覚形容詞：触覚、嗅覚、聴覚、視覚、味覚、痛痒などの生理的感覚を表す形容詞
（堅い、臭い、喧しい、明るい、甘い、痛いなど）
② 次元形容詞：空間の長短、高低、寛窄、深浅、太細、厚薄、大小、遠近を表す形容詞
（長い、高い、広い、深い、太い、厚い、大きい、遠いなど）
③ 評価形容詞：表現主体の対象に対する評価を表す形容詞
（良い、悪い、酷いなど）
④ 感情形容詞：表現主体の感情を表す形容詞
（嬉しい、悲しい、愛しいなど）

感情形容詞の下位分類は、シソーラスによって多かったり少なかったりする。この研究では、「歓喜、好感、安心、興味、滑稽、残念、苦悩、嫌悪、恐怖、羞恥、立腹、罪悪」の分類を試案とした。

２－３　形容詞分類のまとめ

尾上（1997）と頼（2006）の形容詞分類は、表２のようにまとめることができる。
なお、尾上の分類順はより主観的か、より客観的かによって並べられているため、尾上の分類を主体として頼の分類をあわせることとする。

また、尾上の温度・痛覚と頼の感覚など[3)]、分類は必ずしもその定義や具体例がまったく同じというわけではなく、便宜上照合させている。

3．合唱における言語活動とは－合唱コンクールにおける講評の分析結果から－

3－1　分析の項目と対象及び方法

表2　尾上及び頼による形容詞の分類

尾上の分類	頼の分類	具体例	主観と客観
存在の形容詞文	次元形容詞	多い、少ない、ない	客　観
情態形容詞文		赤い、青い、短い	↕
評価の形容詞文	評価形容詞	よい、悪い、すばらしい	
温度・痛覚の形容詞文	感覚形容詞	明るい、痛い、冷たい	
情意形容詞文	感情形容詞	嬉しい、惜しい、悲しい	
欲求の形容詞文		欲しい、～したい	主　観

3－1－1　分析の項目

本稿は、平成20年度の『学習指導要領』に示された「音楽を形づくっている要素」、具体的には「音楽を特徴づけている要素」（音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズ）と「音楽の仕組み」（反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係）を項目として設定し、講評を抽出し直した上で語句を分析していく。

表3　髙橋及び深堀による分析の項目

髙橋の項目	深堀の項目	備考
音色	音色	
リズム	リズム	
速度	速度	
旋律	旋律、音高・音程	
強弱	強弱、声量	
音の重なりや和声の響き	響き、ハーモニー、音高・音程	
音階や調	該当無し	これらの項目については、深堀の全ての項目の中からキーワードで講評を抽出し直した。したがって、項目が重複している講評がある。（音色の変化が欲しいは「音色」と「変化」など）
拍の流れやフレーズ	該当無し	
反復	該当無し	
問いと答え	該当無し	
変化	該当無し	
音楽の縦と横の関係	該当無し	
	発声法、発語、解釈、歌詞、選曲、指揮者、ピアノ、関心・意欲・態度、その他（総合的な表現）	歌詞の関連や、コンクールのため指揮者やピアノ伴奏関連の講評もみられるが、本稿では分析の対象としない。

3）例えば、頼は「明るい」を感覚形容詞に分類しているが、尾上は「くらい」を情態形容詞文としている。

３－１－２　分析の対象

①対象雑誌

全日本合唱連盟の機関誌『Harmony』

第79号（1992）、第83号（1993）、第87号（1994）、第91号（1995）、第95号（1996）、第99号（1997）、第103号（1998）、第107号（1999）、第111号（2000）、第115号（2001）、第119号（2002）、第123号（2003）、第127号（2004）、第131号（2005）、第135号（2006）、第139号（2007）

②対象内容

全日本合唱コンクール全国大会中学校部門の講評より、分析項目に従って抽出

３－１－３　分析の方法

①　深堀によって論じられた講評を、前述表３のように抽出し直す。

②　それぞれの講評において使用された形容詞を、４つに分類する。比喩表現については講評の重要な位置づけであることを認めながらも、それが使用される背景や共有する共同体のあり方とかかわるため、本稿では分析の対象としていない。各形容詞の分類は、次の通り。

○**次元形容詞**は、属性、すなわちものを形や量で表すものとする。研究者によっては、「白い」「赤い」などを視覚によるとして感覚形容詞に分類する場合もあるが、本稿では次元形容詞とする。

○**評価形容詞**は、人や物を評価したり程度を表したりする形容詞である。次元形容詞とも捉えることが可能な「若い」「ういういしい」や、ものの音を表す「やかましい」「さわがしい」「うるさい」、ものの動きを評価する「はやい」「おそい」はこの評価形容詞として分類する。

○**感覚形容詞**は、五感などの生理的感覚を表す形容詞である。感覚を表す「気持ちいい」「快い」「痛い」や、味覚を表すもの、ものの感覚や質を表す「明るい」「暗い」「柔らかい」「冷たい」などがこれに分類される。

○**感情形容詞**は、「うれしい」「楽しい」「くやしい」「悲しい」などが思い浮かぶだろう。、また、欲求を表すものも含み、「欲しい」や「～して欲しい」、広くは「～してもよい」「～するとよい」やその意を汲み取れるものも感情形容詞として分類する。

③ 項目（音楽を形づくっている要素）ごとの量的傾向・質的傾向をもとに、考察を行う。

３－２　分析の結果

３－２－１　項目別講評の形容詞分類例

ここでは、「音楽を形づくっている要素」の項目別講評の形容詞分類として一例を示す（第91号［1995］）。

ただし、強弱及び音階や調は、講評の数や形容詞分類の関係から他の号のものを示している。

形容詞の分類は、次元形容詞、評価形容詞、感覚形容詞、感情形容詞である。

表４　項目別講評の形容詞分類例

項目	講　　評	
音色	・男声はすばらしい ・明るい声 ・男声の音色をもう少し整えて ・男声が素直でのりがいい ・音色に透明感がほしい	・やわらかい特徴のある声 ・声も朗々としている ・音色をもう少し変えて ・声は柔らかくて充実している

	・魅力的な声のある団体 ・この曲に対して音色が暗い ・もうすこし音色の変化があってもよい ・声もやわらかくてよい ・声のある立派な団体 ・曲作りも音色も自然でよい ・透明感、清潔感がある ・女声と男声の音色作りのバランスが問題	・きれいな音色でまとめた ・音色の透明感がほしい ・音色に変化がほしい ・音色の統一感がある ・ちょっと音色が浅め ・声がやわらかい ・健康的な歌声がよい ・歌声のクリアさが気になる
リズム	・リズムも軽くてよい ・ウラのリズムをもうすこし出るとよい	・４拍子と３拍子のテンポの違いをだして音楽に変化を
速度	・ちょっとテンポが速すぎた ・曲作り、テンポの設定に好感 ・棒がよくテンポがよかった ・テンポの設定に変化が感じられない ・テンポが遅いため求心力、説得力に欠けた	・少し速すぎた ・テンポのアゴーギクもうまく彫が深い ・テンポの動かしすぎ ・テンポがちょっと遅い ・テンポがよかった
旋律	・だんだん上ずった ・ピッチが気になる ・メロディの大切な音がぶら下がる ・無伴奏のところでピッチが合わない ・コーラスが上ずる	・音もきちんととれている ・メロディ・ラインのはっきりある大事なところがときどきちょっと落ちた ・ときどきメロディが落ちるのが残念 ・ア・カペラがちょっと上がった ・大事なところで声が下がる
強弱(1995)91号	・ppの表現などよく考えてあった ・すばらしい充実度のffをならしたが感動に結びつかない ・声量がある	・dim.の余韻の作り方など感心 ・ｆとｐの幅が足りない ・声はたっぷりしている ・声もよく出ていた
音の重なりや和声の響き	・ハーモニーを正確に ・メロディとヴォカリーズのバランスを考えて ・ハーモニーも音程も気持ちがよかった ・すごいハーモニー感覚 ・ア・カペラの部分のハーモニーはきかせてほしかった ・響きが暗くなったのが惜しい ・ユニゾンがしっかりしている ・ユニゾンもきれい	・ハーモニーの収まり方がすばらしい ・疲れてハーモニーが下がった ・声はよくまとまっていた ・ハーモニーを聴きあっているいい演奏 ・声がもっと融和してほしい ・ハーモニーがあやしい ・安定した響き ・ハーモニーも音程も気持ちがよかった ・新鮮な響き
音階や調(1992)79号	・普段から音階の練習を	・フレーズの仕上げをもっと丹念に沖縄の旋法の色彩感がもっと出てほしい
拍の流れやフレーズ	・４拍子と３拍子のテンポの違いをだして音楽に変化を	・伴奏の流れがよい ・フレーズがつながらない
反復	・同じところの繰り返しでは変化をつけて	・同じことの繰り返しでは変化を
問いと答え		・
変化	・２曲とも作曲家が同じため変化がなく損 ・もうすこし音色の変化があってもよい ・４拍子と３拍子のテンポの違いをだして音楽に変化を ・テンポの設定に変化が感じられない ・デュナーミクの変化がもう一息あったほうがよい	・４拍子と３拍子のテンポの違いをだして音楽に変化を ・音色をもう少し変えて ・起伏のある演奏 ・表現もちょっとワンパターン ・ちょっとメリハリにとしい
音楽の縦と横の関係	・構成感がつながらない ・最後の盛り上がりもよくこなした	・聴かせどころを決めて

3－2－2　項目別講評の形容詞分類

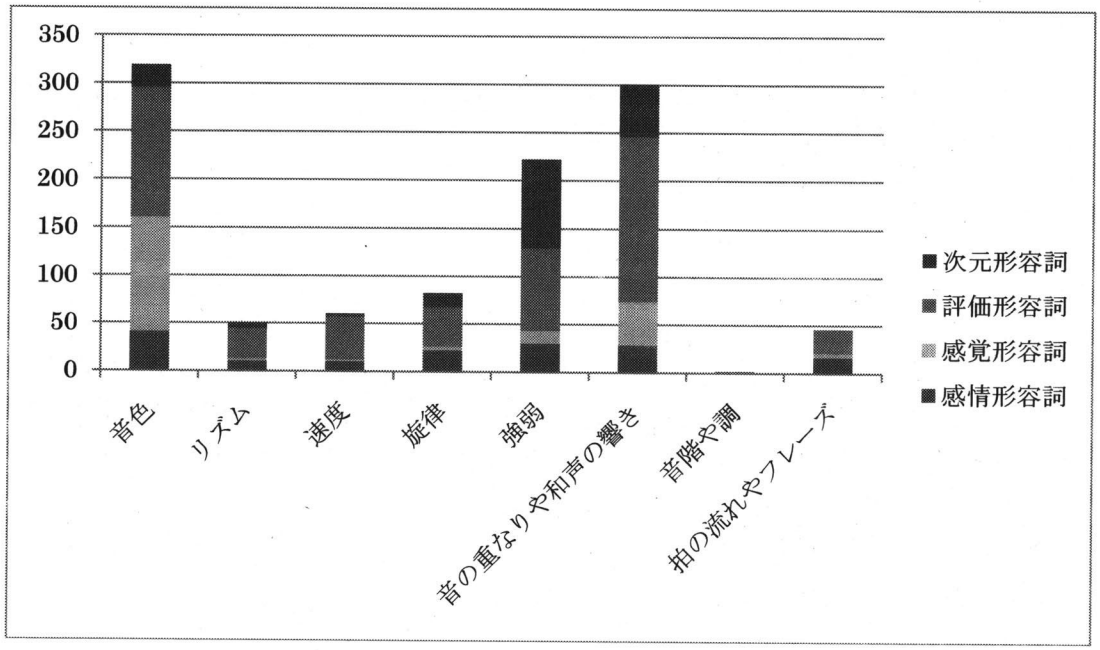

図３　「音楽を特徴づけている要素」(音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズ）の講評における形容詞の分類

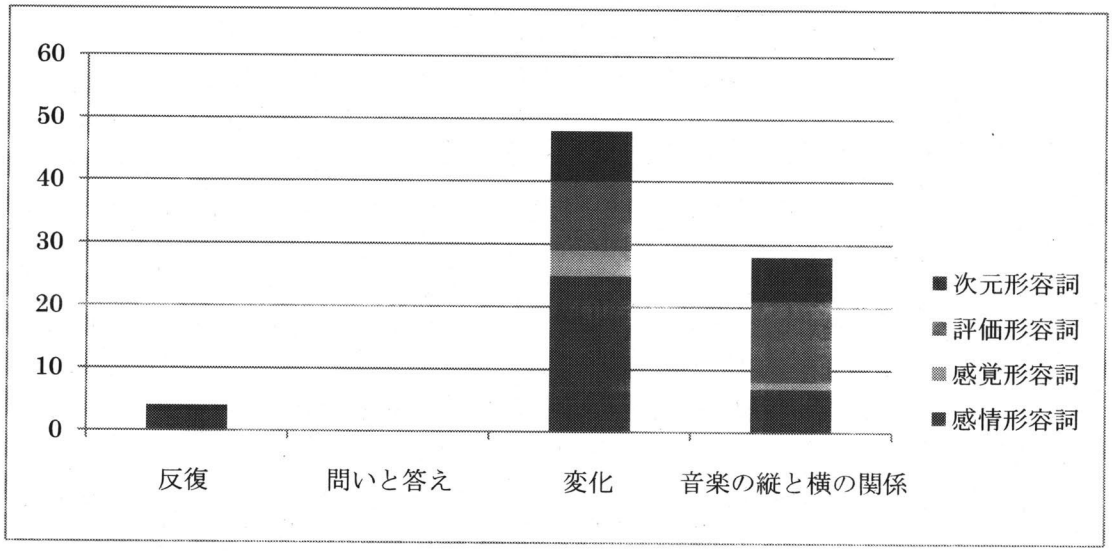

図４　「音楽の仕組み」（反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係）の講評における形容詞の分類

3－2－3　4つの形容詞に分類された具体的講評

① 次元形容詞

するどい、にぶい、細かい、大きい、小さい、太い、多い、少ない、長い、短い、重い、軽い、厚い、うすい、高い、低い、広い、狭い、深い、浅い、力強い、強い、弱い、重厚な、豊かな、リッチな、シャープな。その他、幅や奥行きに関する表現も次元形容詞に置き換えられる場合はこれに含めた。

② 評価形容詞

女声らしい、中学生らしい、イタリアらしい、あやしい、やさしい、ふさわしい、よい、難しい、ぎこちない、かわいらしい、悪い、美しい、きれい、すばらしい、かわいい、はやい、おそい、うまい、すがすがしい、淡白な、ぶっきらぼうな、清らかな、さわやかな、おおらかな、丁寧な、マイルドな、伸びやかな、幻想的な、的確な、無垢な、清純な、純粋な、新鮮な、自然な、丹念な、清潔な、立派な、素直な、魅力的な、健康的な、明瞭な、不明瞭な、不安定な、有効な、直線的な、正確な、ドラマティックな、ファンタスティックな。

③ 感覚形容詞

快い、気持ちいい、小気味いい、あまい、かたい、やわらかい、あたたかい、濃い、明るい、暗い、輝かしい、透明な、ソフトな、ふくよかな、ブリリアントな、クリスタルな、クリアな、なめらかな、まろやかな。

④ 感情形容詞

楽しい、おもしろい、惜しい、残念な、欲しい（～して欲しい）。

4．考察

4－1　審査員の講評のまとめ－言語化しやすい要素としにくい要素－

図3及び図4は形容詞の分類とその量的傾向について示しているが、これは抽出した実数のみならず講評の総数に密接に関係していることは明らかである。ここでは、合唱コンクール審査員の講評における形容詞を量的・質的に分析する。

①量的傾向

図3及び図4のように傾向をまとめた結果、要素によって量的に差が大きいことは興味深い。量的に多い要素は、順に「音色」「音の重なりや和声の響き」「強弱」、量的に少ない要素は、順に「問いと答え」「音階や調」「反復」「音楽の縦と横の関係」である。これは、コンクール審査員の講評の分析結果ではあるが、いわゆる音楽の専門家の傾向と捉えることが妥当であろうか。

髙橋（2010）は、大学生を対象として合唱曲の鑑賞活動を行い、「音楽を形づくっている要素」にそれぞれどのような内容を記述するか、調査している。記述された内容にかかわらず、要素ごとに学生数のみを数えてみると、多い順に「速度」「強弱」「音の重なりや和声の響き」「音色」、少ない順に「問いと答え」「音楽の縦と横の関係」「旋律」「音階や調」「拍の流れやフレーズ」と続いた。この調査で「反復」が量的に多かったのは、「反復があった」「メロディのくり返し」など、反復の存在に気づいただけの簡単な記述も数に入れたからである。この調査と本稿の審査員講評を比べてみると、コンクール審査員の講評も大学生によって記入された内容も、言語化しやすい要素及び言語化しにくい要素としては大差ないことが伺えよう。

この結果から、「音楽を特徴づけている要素」がより言語化しやすく、「音楽の仕組み」は言語化しにくい傾向があることが明らかである。前者は主観的な「感覚形容詞」「評価形容詞」「感情形容詞」を使用しやすく、初めて聴いた音楽でも言語化することが可能である。一方後者は、

「音楽の仕組み」を構成する要素に気づくだけではなく、その音楽においてどのような位置づけあるいは働きがあるか、音楽理論の知識や分析力をもって聴かなければ言語化することは難しいだろう。その意味では、合唱コンクールの講評においては、「音楽の仕組み」に関する講評のさらなる充実が望ましいといえよう。

②形容詞の種類と要素

表４の質的傾向をみていくと、ひとつの講評にいくつの形容詞を使用しているか、あるいは４つの種類のどの形容詞が多く使われているか、要素によって様々であることがわかるだろう。

いろいろな種類の形容詞を使用しやすい要素、ほとんどひとつ、多くてふたつ程度の形容詞しか使用していない要素があることは興味深い。

「音色」「音の重なりや和声の響き」では、次元形容詞は量的に少ないものの、４種類の形容詞を用いて講評が行われていることがわかる。「強弱」では、fやpに関する個別の講評はその次元や感覚について形容詞が用いられているが、「音量（声量）」においては「声がよく出ている」など、「よい」という評価形容詞を用いた講評が多用されている。

「リズム」「速度」「旋律」「拍の流れやフレーズ」は、「よい」「おもしろい」「はやい（おそい）」などの評価形容詞が主に用いられる傾向がある。「反復」は、「くり返しは変化を付けて欲しい」という欲求の感情形容詞が主である。

「問いと答え」の講評は皆無、「音階や調」では、形容詞はほとんど用いられずに、音階（的）フレーズ、転調、純正調について講評されている。「音楽の縦と横の関係」は、主観的な感覚形容詞ではなく、より客観的な評価形容詞及び次元形容詞の割合が大きい。

以上のことから、言語化しやすい要素は４種類の形容詞を用いることが可能であり、言語化しにくい要素は主に評価形容詞を使用しているという結論に至った。

③講評の主観性と客観性

図５は、コンクールの講評を４つの形容詞に分類した総数を示している。なお、次元形容詞はより客観的であり、評価形容詞、感覚形容詞、感情形容詞と下に向かうにつれて主観的である。この主観性と客観性の背景については、前述図２を参照されたい。

図５から、量的に評価形容詞が突出して多いことが明らかである。これは、コンクール審査

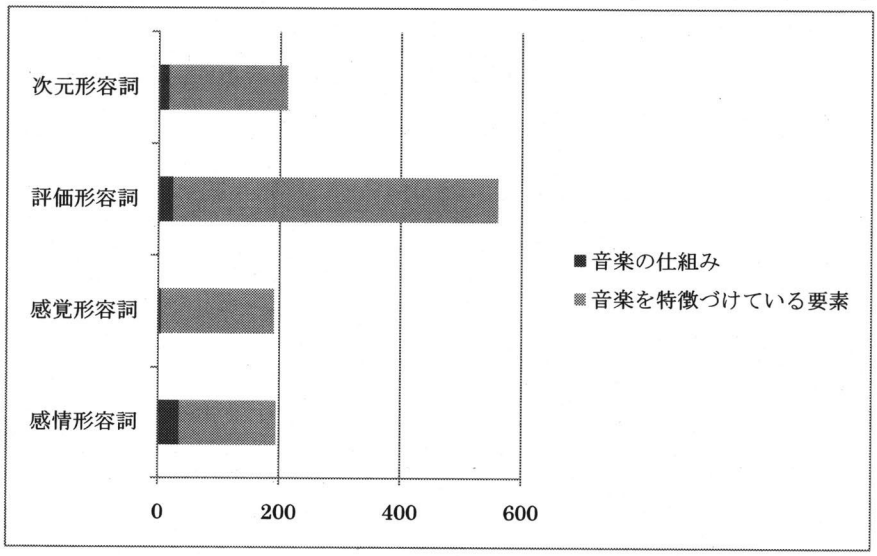

図５　４つの形容詞に分類された講評の数

の講評という特殊性と対象が中学生であることから、「よい」「美しい」などと認めて誉めた上で今後取り組むべき課題や批評を行うという教育的配慮によると思われる。

この評価形容詞以外は次元・感覚・感情それぞれの形容詞がほぼ同数であり、特に主観・客観に講評が偏っていたとはいえないだろう。今後の講評に望むことは、前述の通り、特に「音楽の仕組み」を構成する要素について量的に増やすことであり、その内容も次元形容詞を用いて客観的にその音楽の属性を言語化することであろう。

4－2　合唱における言語活動への示唆

前述の髙橋（2010）による調査の結果、言語活動の問題点は次のように導かれた。

①「リズム」「速度」「拍の流れ」など音楽を形づくっている要素を各々聴き分け、さらに「聴き取る力」をもつ耳を育てること。「専門用語の理解が困難」「聴き分けることが困難」に対処する必要がある。

②音楽をあらわす語彙の問題。例えば、この調査の「音色」の項目では、「きれい」「美しい」「よい」等の語句を記述した学生が多かった。

③量的傾向から、「音楽の仕組み」に関する理解が不足していること。これは、音楽を総合的に捉える視点の欠如とも言えるだろう。

④　②の語彙を使った適切な表現。「聴き取ったことを言葉に出来ない」「適切な言葉が出てこない」「曖昧な言葉になる」に対処する方法論が必要であろう。

以上の問題点を踏まえた上で、本稿では「音楽をあらわす語彙」と「語彙を用いた適切な表現」について提案していきたい。

4－2－1　音楽をあらわす語彙－4つの形容詞の分類による－

音楽をあらわす語彙は、前述の具体的な形容詞分類を用いることが望ましいだろう。実践にあたっては、発達段階に合わせて具体例を選択し、その語彙を増やしていくと良いだろう。

表5　4つの形容詞に分類された具体的な語句

項　目	聴き取る力と感じ取る力	具体例
音楽の要素がどのような存在、情態（形や量、属性）であるか **次元形容詞**	聴き取る力	するどい、にぶい、細かい、大きい、小さい、太い、多い、少ない、長い、短い、重い、軽い、厚い、うすい、高い、低い、広い、狭い、深い、浅い、力強い、強い、弱い、重厚な、豊かな、リッチな、シャープな、その他
音楽の要素をどう評価するかあるいはその程度はどうか **評価形容詞**	感じ取る力 （聴き取る力）[4]	女声らしい、中学生らしい、イタリアらしい、あやしい、やさしい、ふさわしい、よい、難しい、ぎこちない、かわいらしい、悪い、美しい、きれい、すばらしい、かわいい、

4）程度をあらわす「はやい」「おそい」などの場合、「聴き取る力」と捉えた方が「音楽を形づくっている要素」を言語化するときに混乱しないのではないか。

		はやい、おそい、うまい、すがすがしい、淡白な、ぶっきらぼうな、清らかな、さわやかな、おおらかな、丁寧な、マイルドな、伸びやかな、幻想的な、的確な、無垢な、清純な、純粋な、新鮮な、自然な、丹念な、清潔な、立派な、素直な、魅力的な、健康的な、明瞭な、不明瞭な、不安定な、有効な、直線的な、正確な、ドラマティックな、ファンタスティックな
音楽の要素に対する感覚（生理的感覚）や質はどうか **感覚形容詞**	感じ取る力	快い、気持ちいい、小気味いい、あまい、かたい、やわらかい、あたたかい、濃い、明るい、暗い、輝かしい、透明な、ソフトな、ふくよかな、ブリリアントな、澄んだ、クリスタルな、クリアな、なめらかな、まろやかな
音楽の要素に対する感情や欲求はどうか **感情形容詞**	感じ取る力	楽しい、おもしろい、惜しい、残念な、欲しい（～して欲しい）

４－２－２　語彙を用いた適切な表現－キーワードから文章へ－

語彙を用いた適切な表現については、キーワード（要素）に形容詞を加えて文章化していく方法論を提案したい。

①「聴き取る力」を言語化する場合は、キーワードに主に次元形容詞を加える

「聴き取る力」を言語化するにあたっては、より客観的な次元形容詞を用いることが望ましいだろう。ただし、前述の通り、「はやい」「おそい」のような程度をあらわす評価形容詞を使用する場合もある。

チェロは	深い	音色で	ヴァイオリンより	低い	調だった
	次元形容詞	キーワード		次元形容詞	キーワード

②「感じ取る力」を言語化する場合は、キーワードに評価形容詞、感覚形容詞、感情形容詞を順に加えていく

まず、「音楽を形づくっている要素」の中でも、前述の通り比較的言語化しやすく、しかもいろいろな形容詞を使用することができる要素をキーワードとして抽出することが第一段階である。

最初にキーワードに加える評価形容詞は、もっとも使いやすい形容詞であろう。前述の調査においても、いろいろな要素において評価形容詞の「よい」「美しい」「きれい」が多用された。もっとも、これは教育現場でも同様であることが予想され、この状態からどのようにしてさらに文章として広げていくことができるかが重要であることは言うまでもない。

キーワードに評価形容詞を用いると、「美しい音色（音色が美しい）」「良いリズム（リズムがよい）」となる。これに「甘い」「明るい」「輝かしい」「やわらかい」「かたい」などの感覚

形容詞を加えることは、そんなに困難とは思われない。「やわらかい音色が美しい」「かたいリズムがよい」などである。さらに感情形容詞については、「悲しい」「うれしい」などの感情をあらわすものは取り入れることが容易である。ここでは詳しく触れないが、「～して欲しい」という欲求を表す感情形容詞はレベルが高く、リーダーや教師、合唱指導者は積極的に活用すべきと考える。特に、評価形容詞で否定的な内容を述べなければならないときは、その後に欲求の感情形容詞でフォローすべきであろう。

やわらかい	音色が	美しいので	私は	うれしく	思った
感覚形容詞	キーワード	評価形容詞		感情形容詞	

おわりに

本稿は、合唱コンクール審査員の講評を「音楽を形づくっている要素」をもとに抽出し、さらに４つの形容詞に分類することで、その量的･質的傾向を明らかにした。音楽科における「言語活動」では、「聴き取る力（知覚）」は「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚」することであり、「感じ取る力（感受）」は「それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受すること」とされている。本稿によって、「音楽を形づくっている要素」や要素同士の関連に関して記述していても、その形容詞によってはより主観的な「感じ取る力」の言語化であることが明らかになったことは意義深いと考える。

本稿の分析を通して、音楽を「総合的な表現」として捉える視点の必要性を痛感した。また、４つの形容詞に分類したが、いわゆる一般的な意味での形容詞の分類と、音楽を言語化したときの形容詞では、微妙に意味がずれることは否定できない。例えば、次元形容詞は空間的な属性をあらわすものでありながら、音楽の場合はより感覚的であった。これらについては、検討が必要であると思われる。今後は、４つの形容詞をもとにした言語活動の方法論を具体化し、合唱活動や合唱の授業で検証を行いたい。

引用・参考文献

大石亨（2006）「日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について」日本認知言語学会第７回全国大会発表資料

髙橋雅子（2010）「音楽科教育における言語活動に関する研究－『コミュニケーションや感性･情緒の基盤』の観点から－」山口大学教育実践総合センター『研究紀要』第30号

深堀頌子（2008）「音楽教育における合唱評価に関する一考察－全日本合唱コンクール審査結果の分析をもとに－」

茂木健一郎（2001）『心を生み出す脳のシステム　私というミステリー』日本放送出版協会

茂木健一郎（2004）『脳内現象　〈私〉はいかに創られるか』日本放送出版協会

賴錦雀（2006）「日本語シソーラスにおける感情形容詞」『台灣日本語文學報21號』

『Harmony』第79号（1992）、第83号（1993）、第87号（1994）、第91号（1995）、第95号（1996）、第99号（1997）、第103号（1998）、第107号（1999）、第111号（2000）、第115号（2001）、第119号（2002）、第123号（2003）、第127号（2004）、第131号（2005）、第135号（2006）、第139号（2007）全日本合唱連盟

付記：本稿は、日本音楽教育学会第41回大会（2010年９月26日、埼玉大学）における口述発表資料に加筆したものである。